

近現代とは、人々による海外への渡航が頻繁化するとともに、海外からも人・物・金が流入することにより地域社会が世界と密接に結びついた時代と特徴づけられるだろう。本講義で考察対象とする中国東南部の福建省では、清末から民国にかけての時期に海外への移民や出稼ぎが盛んに行われ、1841～1949年の出入国統計は約187万人の出超を示していた。華僑（海外出稼ぎ者及び移民）からの送金は膨大であり、またその資金を活用した諸事業の実施は僑郷（華僑の故郷）に大きな影響を与えたのである。

以上の認識を踏まえ、本講義では福建省の福州地区（旧福州府）と興化地区（莆田市、仙游県）を主要な対象として、東南アジアへの移民状況とその社会的背景を考察したい。

周知のように東南アジアでの華僑のなかでは、福州系や興化系は少数派に止まっていた。これにも関わらずこれらの人々の動向に注目するのは次の理由による。すなわち20世紀初頭にキリスト教プロテスタントに属するアメリカのメソジスト監督教会（美以美会）が深く関与して、福州地区及び興化地区から英国の保護国であったサラワク王国や英領マラヤへ向けての移民事業が展開された。福建で布教したプロテスタント各派のなかでも、強い勢力を誇ったのがメソジスト監督教会であった。大量に保存されている教会文書には移民の過程及びその社会・経済的背景に関する資料も大量に含まれている。このように福州・興化地区からのキリスト教徒移民を考察対象とすることには資料上の大きな利点が存在する。またキリスト教の受容、それにともない発生した文化摩擦も中国近代史、さらにはアジア近代史上の重要なテーマである。それゆえ福州・興化からのキリスト教徒移民を対象とすることは、華僑（海外移民）とキリスト教の受容という中国近代史における二つの重要な事象を、相互連関的に考察する利点を有するのである。

本講義では内容を二部構成とする。第一部では福建省からキリスト教徒移民が生み出された背景を、清末から民国時期にかけての中国国内の政治情勢、国際情勢、僑郷における社会・治安状況に着目しつつ具体的に考察する。第二部ではサラワクのシブでの華僑コミュニティが1937年から勃発した日中戦争においてどのように中国支援の義捐活動（「籌賑運動」と呼ばれる）を遂行したのかを論じる。

第一部では、民国時期に多くの移民が析出された背景として以下のことを指摘した。すなわち、福州・興化地区からの南洋移民の背景には、僑郷の社会経済的事情のみならず、日清戦争による王朝の統治の動揺、保護者としての基督教勢力の伸展、さらに教民と在地社会との摩擦などの複合的な要因があった。特に閩清と古田ではキリスト教徒による移民を契機として、それ以降華僑の数が増加し著名な僑郷となった。辛亥革命後の福建では北洋系の外来政権による統治が長期に亘り、軍隊による労働力の徴発、匪賊による誘拐が民生を極度に脅かした。移民の背景としては経済的要因も重要であるが、劣悪な治安や強引な徴兵もそれに劣らず重要であった。

キリスト教会は地域の民衆に対して、移民ルートによる生存の道や教育による社会上昇の梯子を提供した。そして人々も教会のもつ様々な資源を利用したといえる。さらに日中戦争時期、徴兵を逃れて東南アジアへ逃れたり、匪賊に加入したりする人々が多くでたが、これは国民政府による対日抗戦の総動員体制構築に多大な影響を与えた。

第二部では、次の内容を論じた。日本の中国への侵略に対しては、陳嘉庚の指導の下で、1938年8月15日（第二次上海事変勃発直後）にシンガポールでマラヤ・シンガポール華僑籌賑祖国傷兵難民大会委員会が設立され。厦門や広州の陥落後、1938年10月に「南洋華僑籌賑祖国難民總會」が組織され、中国への義捐金が集められた。また日本製品ボイコットや中国に戻ってエンジニア（機工）となる人材も求められ、サラワクや北ボルネオ（サバ）でもこの活動は展開されることになった。

一般的に「籌賑運動」は抗日戦争に直面した南洋華僑が祖国を支援した運動として、その愛国行為や民族主義の高揚が高く評価されてきた。無論、上記側面は重要である。しかし国民政府の宣伝史料や華僑領袖層の文献などの“政治的”、“上から”、且つ“中国語で文字化された”史料に主に依拠して歴史を再構成すると、運動の高揚面や、史料作成者にとっての「あるべき姿」に引きずられてしまう恐れがある。本講義では特定の地域社会に視野を下降させ、「民衆」の視点や地域の文脈、さらに地域間比較を踏まえ、サラワクにおける運動の実態を密度濃く論じた。

サラワク特にシブでは、籌賑運動において中国からの短波ラジオを受信し戦争の状況を伝える華字新聞が発行された。また中国からの抗日宣伝雑誌や画報、映画、歌曲の流入を通じて中国民族意識や祖国中国との連帯が宣伝された。新式メディアを利用して中国から垂直的に祖国の表象が移入され、都市部の有力商人や教会の指導層、教育界の人々がこれを受容した。キリスト教会が近郊の農村部を含めて民衆に影響力を持ち、人々の組織化が比較的良好であったシブはサラワクのなかでも特別に籌賑運動が活発な地域であった。

しかし広大で交通も不便なサラワク各地で創設された籌賑運動諸団体間での水平的連絡・統合は容易ではなく、運動の成果においても地域差も大きかった。ゆえにシブでの様態を以て安易に全サラワクに敷衍することはできないだろう。例えばサラワク王国の首府クチンでの成績は駐サンダカンの中国領事を失望させた。クチンでは華僑指導者の熱意が問題とされただけでなく、団体間の対立も運動を妨げた。サラワク政府による運動への規制も首府では相対的に強かった。その他小都市における運動の組織化・制度化は容易ではなかったようである。

また日本の台湾拓殖による調査報告（「クチンの華僑は大部分ゴム園の労働者で商人の数は極めて少数に過ぎない。サラワク華僑は政治的運動には興味をもたず、中国から各種出版物が同地方に送付されても売れない状態にある。其理由としては大多数の労働者は無学文盲である」とクチン近郊の Bau での聞き取り（「籌賑委員会の活動は聞いたことはあるが、自分が食べる飯も十分ではないなか、民族主義的な力量はなかった」）は、一致して民衆の経済状況が籌賑運動の成果を大きく規定したことを示している。籌賑運動は民族意識の強弱もさることながら、サラワク各地の華僑社会がどの程度組織化（統合）されていたか、また人々の生活の豊さ・安定性の程度に大きく左右されたといえよう

なお、籌賑運動を論じた本講義で垣間見られたサラワク華僑社会内部の格差や地域ごとの多様性、地域と地域との連絡の悪さ（散漫さ）などは、中国との往来が減少し、生活の場たるサラワクへ人々が関心を深めていく 1950 年代以降の政治（政党）運動の在り方をも規定することになるだろう。しかしその内容については別の機会に譲りたい。